

第5学年 社会科 学習指導案

1 単元名 これからの食料生産とわたしたち

小単元名 これからの食料生産

2 単元の目標

- (1) 食料生産を取り巻く現状と問題について関心をもち、これからの食料生産について意欲的に調べたり考えたりしようとする。 [社会的事象への関心・意欲・態度]
- (2) 我が国は食料の多くを輸入に頼っていることに問題意識をもち、安全で、環境によい食料生産を進めていくことの大切さについて考えることができる。 [社会的な思考・判断・表現]
- (3) 食料生産を取り巻く現状と問題について、地図や地球儀、写真、統計グラフなどの資料を効果的に活用して調べ、調べたことや考えをまとめることができる。 [観察・資料活用の技能]
- (4) 食料の安定確保のために自給率を高めていくことや、安全で健康によく、環境にもやさしい食料生産を進めていくことの大切さを理解することができる。 [社会的事象についての知識・理解]

3 単元の評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
自分の生活と食料生産との関わりをもとに、我が国の食料生産の現状と未来について関心をもち、我が国の食料生産の発展を願ってそのためにどうすればよいのかを考えようとする。	我が国の食料生産をめぐる問題について、学習問題や予想、学習計画を考え表現するとともに、環境への影響、輸入食材の安全性、生産者と消費者などの観点をもとに思考・判断したことを適切に表現できる。	我が国の食料生産の現状や課題について、統計など各種の資料を活用するなどして必要な情報を集めて読み取り、図や文章にまとめることができる。	我が国の食料生産は国民生活を支えていることやこれからの食料生産には、就業者の減少、食品の安全性、環境保全、自給と輸入の関係、生産者と消費者の新しいつながりなど、様々な課題があることを理解することができる。

4 指導上の立場

○ 教材観

本単元は、学習指導要領第5学年の内容(2)ア「様々な食料生産が国民の食生活を支えていること、食料の中には外国から輸入しているものがあること」を受けて設定されている。児童は、1学期に米作りや水産業に関する学習を通して、安全でおいしい物を届ける工夫や努力だけではなく、「就業者の高齢化」「食生活の変化に伴う消費量の減少」といった問題が生じていることを学習してきた。

当たり前のように口にしている食料は、国内外の人の手によって作られていること、さらに食料生産における諸問題を解決するために生産者や政府などが様々な取組を行っていることの意味に気付くことは、これからの日本の食料生産や食料確保を進める上で、非常に重要なことである。なぜなら児童自らが食料生産を支える消費者としての自覚をもつきっかけとなり、ど

のような取組を進めていけばよいか、考えたり実践したりすることの礎となるからである。このように本単元は、我が国の食料生産に関わる様々な問題やその解決に向けて努力する人々の姿を学習することを通して、消費者と生産者双方の立場から、我が国の将来の食料生産のあり方について考える上で意義がある。

○ 児童観

本学級の児童（男子15名、女子14名、計29名）は、落ち着いた雰囲気の中で、友達と協力しながら活動に取り組むことができる。4月から問題解決的な学習を行い、自分なりの予想を立て、資料で調べたり友達と話し合ったりして解決する学習方法を身に付けている。その中で、必要な資料を見つけたり、資料を読み取ったりする力が身に付いてきた。しかし、調べた社会的事象の意味を考えたり、複数の資料を比較して関連性を見つけたりすることやそれらを文や図などで表現したり、全体で発表したりすることを苦手としている。自立した消費者として、主体的に判断したり行動したりするためにも、得られた情報をもとに自分の考えを表現したり、伝え合ったりする力を高める必要がある。

また、本学級の児童は、約半数が祖父母または親戚等が米作りを行っており、米作りや収穫を体験したことがある児童も多い。しかし、野菜や果物などを栽培した経験は少なく、約8割の児童はこれらの食品をスーパーマーケットで購入しているが、家族と一緒に買い物をする機会があまりないことが分かった。家族と一緒に野菜や果物を選んだ経験があった児童は、「よくある」が約2割、「たまにある」が約6割だった。選ぶ時の基準として多かったのは「値段」「見た目」の2つで、それぞれ全体の約3割ずつである。その理由として、「安い方が無駄遣いにならない」「個々の値段が高いと全体の金額が高くなる」「萎れていたり虫に食べられていたり、形が悪かったりするものは買いたくない」と答えている。この質問において、「産地」を基準に選んでいる児童は、わずか1割にしか満たなかったことから、児童にとって、食料品を買う時の基準は「値段」や「見た目」であることが分かった。また、身近なハンバーガーチェーン店の外国での異物混入問題を耳にしていたことが不安につながっているために、食品の表示で最も重要視しているのが「国産かどうか」という点であることが分かった。生産者直売所を利用していると答えた児童がいなかったことや小林市の食のアンケートにおいて小林市の特産品を回答できなかった児童が多かったことから、小林市で作られている農作物について、また食料品の表示の見方を十分に理解していないことが分かった。

○ 指導観

米作りや水産業の学習では、身近な事例を取り上げることで、学習への興味・関心が高まり、意欲的に調べる活動に取り組むことができた。このことを踏まえ、身近な小林市における産地消の取組を教材化することとした。地域素材を教材化することにより、消費者として自分の考えをもって、積極的に社会的事象の意味を考えたり、発表したりするだけではなく、学習内容を日常生活において実践することができるようにすることもねらいとしている。産地直売所は小林市内にある「百笑村」を教材として取り上げる。また、きのこ農家である本校の保護者に協力を依頼し、写真を提示したり、生産者としての思いを資料として提示したりすることで生産者を身近に感じられるように工夫する。こうすることで生産者は、消費者のニーズにあった食料生産をしていることに気付かせ、消費者として食料品を選ぶ基準を見直したり、今後の食料生産のあり方について自分なりの考えをもって行動したりすることができるように考える。

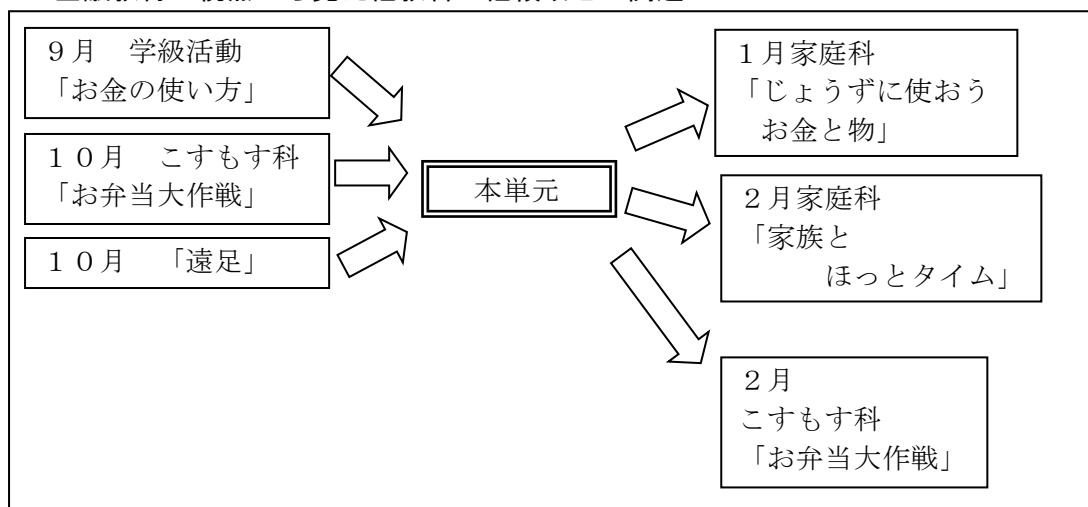
また調べことをもとに主体的に考えたり表現したりすることができるよう、学習形態を工夫し、自分と同じ意見の友達がいること、友達の意見を認め合う雰囲気を醸成することで積極的に自分の考えを発表できるように工夫する。特に本時の指導に当たっては、「訊き歩き」（児童が教室内を移動し、自由に2人組を作り話し合いを行う学習形態）という自由なペア学習を取り入れることにより、自分の考えに自信をもったり、自分の考えを深めたり広げたりできる場を意図的に設定する。このような学習を通して、本研究のテーマである「主体的に考え、行動することができる消費者を育てる」の具現化を図りたい。

5 指導と評価の計画（全5時間）

次	時	主な学習活動・学習内容	金融教育の視点	評価の観点			
				関	思	技	知
一	2	<p>1 生活に欠かせない食料品の多くが、世界中の国から輸入されていることに気付き、これからの食料生産をどのようにしていけばよいか予想する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ スーパーマーケットの写真から、気付いたことを話し合う。 ○ 大豆の自給率のグラフから疑問に思ったことを発表する。 ○ 食料の輸入先と輸入量の割合を表すグラフから、疑問に思ったことを発表する。 	<p>○ 家庭で食料品を購入する時に、限られた予算の下でよりよい生活が送れるよう、必要に応じて国産と外国産を選択していることに気付く。</p> <p>【資金管理と意思決定】</p>	○			
		<p>2 消費者の立場に立って国産・外国産のどちらの農産物を買うのかを話し合い、農産物の輸入がもたらす問題点について考え、学習問題を立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 消費者の立場に立ち、国産・外国産のどちらの農産物を買うのかについて話し合う。 ○ 外国産の農産物の輸入の良い点と問題点について輸入される農作物の変化のグラフやかぼちゃの国内生産と輸入量の月別グラフから考える。 	<p>○ 食品を購入する時、価格・新鮮さ・安全・味という4つの視点のもとに、自立した消費者として自分の考えをもって選択できる。</p> <p>【自立した消費者】</p>		○		
<p>学習問題</p> <p>日本の食糧生産にかかわる問題を解決するためには、今後どうしたらよいのだろう。</p>							
二		<p>1 多くの食料を輸入に頼っても良いのかどうかを調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ アンケートや新聞記事から食料の輸入に対する問題点を話し合う。 ○ 人口増加と耕地面積の変化のグラフを比べて気付いたことを話し合う。 ○ 写真資料から気候の変化による収穫量の減少や自然破壊が生じる場合もあることを調べる。 	<p>○ 持続可能な消費を実践するためにも環境破壊等の問題からも、日本だけではなく海外経済とも関わりがあることを理解する。</p> <p>【経済把握】</p>			○	
		<p>2 輸入される食料への不安が高まる中、国内の生産者はどのような取組をしているか調べる。</p> <p>【本時】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 小林市内の産地直売所における消費者の願いに応える取組や地産地消のよさを伝える取組について調べる。 ○ 農村や漁村におけるグリーンツーリズムやトレーサビリティといった生産者と消費者を結びつける取組を調べる。 ○ 3つの取組の目的について考える。 	<p>○ 消費者として食料生産に係わっているという自覚を高め、地場野菜を選択したり、食品の安全性を確かめて購入したりすることの大切さを知る。</p> <p>【自立した消費者】</p>			○	○

三	1	<p>1 これからの食料を安定的にまかなっていくために、どんなことに力を入れていけばよいか、資料をもとに考える。</p> <p>○ これからの食料をまかなう上での問題点と取り組みなどについて教科書やノートで振り返り、自分の考えをもつ。</p> <p>○ よりどころとなる資料を選び、資料を根拠に自分の考えを分かりやすく表現する。</p> <p>○ 発表しあい、考えを深め合う。</p>	<p>○ 自分も消費者の一人であることを自覚し、これからの食料生産を支えるためにできることを主体的に考える。</p> <p>【自立した消費者】</p>		○		○
---	---	--	--	--	---	--	---

6 金融教育の視点から見た他教科・他領域との関連



7 本時案（第二次 第3時）

(1) 本時の目標

国内の食料生産に携わっている人々は、消費者の願いに応えるために様々な取組や努力をしていることを調べ、訊き歩きを行うことで自分の考えに自信をもったり、深めたりしながらそれらの取組の目的や良さを考えることができる。

(2) 授業研究仮説

展開において、地域素材を教材化し、生産者による食料生産に関する問題を解決させるための取組を3つに分類して考えさせれば、自分が食料生産を支える消費者であることに気づき、お金の使い方について必要性を考え、計画に沿って買い物をするができる子どもに育つであろう。

◎ 「おおむね満足できる」状況（＝B）と判断する児童の姿の例

生産者の3つの取組の目的を考え、食料生産に関する問題は、生産者だけのものではないことに気づき、消費者として地産地消を心がけたり表示シールから必要な情報を読み取ったりしながら国内の食料品を選択し消費することが大切であることをまとめている。

8 本時の展開

段階	学習活動	指導上の留意点 ◆金融教育にかかわる留意点	学習評価 ★社会科の評価 ◆金融教育の評価
導入	1 きらきら学習をする ・ 前時までの学習を振り返る。 2 本時の学習問題を確認する。	○ 食料自給率が低く、多くの食料を外国から輸入しているが外国からの食料の中には安全面で不安があることを押さえる。 ◆ 消費者として食料品を選ぶ時の視点を確認し、生産者と消費者、双方の立場から考えられるようにする。	
【学習問題】 食料生産に関わる人々は、どのような取組を行っているのだろう。			
展開	3 産地直売所のよさを一人①調べる。 ・ すぐに出荷できる。 ・ 誰が生産したか分かる。 ・ 輸送に時間がかからないから安く売れる。 ・ 旬の野菜などを味わえるレストラン ・ 食に関するイベント  <p style="text-align: center;">【調べ学習の様子】</p>  <p style="text-align: center;">【実際の板書】</p> 4 産地直売所以外での取組について一人①調べる。 ・ グリーンツーリズム ・ トレーサビリティ	◆ 意欲的に調べ学習ができるよう、また今後の生活で生かすことができるよう小林市やその周辺の生産者の取組を取り上げる。  <p style="text-align: center;">【使用した資料1】</p> ○ よさを「新鮮」「味」「安心・安全」「安い」という視点で分類し、1つめの視点である「消費者の願いに答えていること」を視覚的にとらえられるようにする。 ○ 地産地消の意味を押さえ、2つ目の視点である「地産地消のよさを伝える取組」であることを提示する。 ○ 実際にICT機器を利用し、バーコードを読み取ってトレーサビリティの実際の様子を見せ、理解を深めさせる。 ○ これらは、生産者と消費者をつな	◆ 地産地消の意味を知り、消費者として食料品を選ぶにあたり、表示シール、トレーサビリティ等を参考に購入できることを理解する。 (ノート・発言)



消費者の願いに
応える取組との
違いは何かな。

【調べ学習の様子】

- 5 食料生産にかかわる問題解決のために、なぜ3つの取組をするのかその理由や目的等について訊き歩きをし、友達⑩考える。
- ・ 消費者の願いに応えればそれだけ商品が売れる。
 - ・ おいしさを知ってもらえれば買う人が増える。

ぼくは、新鮮でおいしくて、安い野菜など、地元の物をたくさん買えば、地元の農家の人の収入が増えて、儲かるとさらに農家の人はがんばって作るようになって、自給率が上がると思いました。



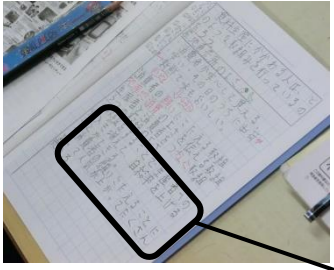
【訊き歩きの様子】

ぐ取組であることを押さえ、3つ目の視点とする。



【米作りで学習した鶴岡市を取り上げた資料2】

- 自分の考えをもって訊き歩きができるよう、考える時間を確保する。



- ・ 生産者の収入が増えて、自給率を上げることができる。
- ・ 消費者の願いに応えることによって、人気が上がってたくさん売れる。

【訊き歩き前のノート】

- 様々な意見に触れられるよう、ルールや目的を明確にして行う。

- ・ 1対1で行う。
- ・ 声をかけられたら断らない。
- ・ 紙を見せずに、言葉で伝える。
- ・ 一方が聞き終わったら、質問または感想を伝える。



【メモをとりながら活動している様子】

- 自分の考えを加筆・修正する時間を確保し、積極的に発表できるようにする。

(ノート・発言)

- ★ 食料生産にかかわる問題点を解決するための取組の目的について、生産者と消費者それぞれの立場から考えている。
- (ノート・発言)

友達の意見の良いところは、赤ペンでメモしておこう。

	<p>6 3つの取組によってなぜ、日本の自給率があがるのか、その理由をみんなと一緒に⑩考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 買う人が増えれば、商品が足りなくなる。足りなくなれば、たくさん作るようになって自給率が上がる。 ・ 消費者も、表示をよく見て地産地消に心がけると地域の生産者の収入が増えて、農家の数が増える。 ・ 食料生産を支えているのは生産者だけではなく、消費者も支えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 消費者のニーズに応えることで、消費量を拡大し、生産量を増加させ、自給率を上げることにつながることを児童の言葉をもとにまとめていく。 ○ 「食料生産にかかわる人々」というのは、生産者だけではなく、自分たち消費者も含まれていることを押さえる。 	
まとめ	<p>7 学習のまとめをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「消費者は」「生産者は」という主語を用いて書かせることで、学習内容をまとめやすくさせる。 ○ 児童の言葉でまとめるようにする。 	

9 板書計画

11 / 2

食料生産にかかわる人は、どのような取組を行っているのだろう。

問題点

- ・ 安全性
- ・ 環境はかい
- ・ 食料不足

消費者の願い

- ・ 安心・安全
- ・ 新鮮
- ・ 安い
- ・ 味

3つの取組の目的

産地直売所のよさ

- ・ 生産者の名前や住所を書いているので責任をもって出荷している。 — **安心・安全**
- ・ その日のうちに出荷できる。 — **新鮮**
- ・ とれたてを出荷できる。 — **味**
- ・ 小林市内で作っており、自分たちで運ぶことができる。 — **安い**

消費者の願いに応える取組

- ・ 旬の野菜等を食べられるレストラン
- ・ 食や農業に関するイベント

地産地消のよさを知らせる取組

その他 = **生産者と消費者をつなぐ取組**

- ・ グリーンツーリズム
- ・ トレーサビリティ

生産者はさまざまな取組をしており、消費者も、地産地消に心がけたり表示シールを見たりして消費量を増やすなど一緒に問題の解決に取り組む必要がある。

10 ○成果と●課題

- 児童にとって身近な小林市の農家さんや産地直売所を取り上げたことで、意欲的に学習にみ、自分も消費者の一人としての自覚をもつことができた。
- 前時までは、教科書を中心に学習を進めていたが、地域を取り上げたことにより、より学習内容が身近なものとなり、消費者の願いに応える形で生産者は工夫や努力をしていることに気付くことができた。
- それぞれの取組の意味を理解し、自分なりの考えをもって訊き歩きを行ったことで、自分の考えに自信をもったり、友達の良さを取り入れたりしながら、まとめを行うことができた。
- 一人調べの時間を多く取りすぎてしまったため、全体で考えを深める時間が短くなってしまい、十分に話し合いで練り上げることができなかった。
- 3つの取組が自給率にどのような影響を与えるのか考えさせる場面で、発問が精選されていなかったことで、児童は混乱し、十分な思考を促すことができなかった。
- 訊き歩き前と後の児童の変容をノート等でしっかりと確認し、思考の変容を分析する必要がある。

11 教材・資料等

- 小林市産地直売所（百笑村の写真）



- 生産者の方と食料品の写真



- 道の駅えびの レストラン



- 野尻町のメロンのイベントのポスター



- グリーンアイ ミニトマト
(トレーサビリティ)

○ 資料1

資料1



自分が生産した農作物をならべている生産者

産地直売所
生産者が野菜やくだものなどの農産物の値段を自分で決めて直接、消費者にはんばいする店のこと



産地直売所にならぶ矢さきさんのきのこ



きのこ生産者の矢さきさんの話

わたしは、産地直売所にきのこを出荷して、はんばいしています。温度やしつ度に気を配って、一生涯命きのこを育てています。ですから、消費者が安心して食べられるよう責任をもって、表示シールには、作った自分たちの名前や住所を書いています。

産地直売所では、少量であっても出荷できるので、その日のうちに出荷することができます。もちろん、とれて数時間後に出荷することもあります。また小林市内できのこを生産しているので、産地直売所が近く、自分たちできのこ運んでいます。さらに自分たちでねだんをつけることで、安く売ることができます。

この産地直売所ではありませんが、野尻町では地元小林のメロンやマンゴーなどのおいしさを知ってもらイベントを行ったり、えびの市にある産地直売所では、旬の野菜やくだものなどが食べられるレストランを開いたりするなど、地産地消のよさを伝えていく取組が行われています。

○ 資料2

資料2

産地直売所での取組の他にも、農村や漁村に宿はくして、自然や人々などとの交流を楽しむグリーン・ツーリズムとよばれる活動や、消費者が安心して食品を買うために、食品がいつ、どこで、どのように生産され、どのようなけいろでお店にあらんだのかを追せきできるトレーサビリティのしくみなど、生産者と消費者を結びつける取組が各地で行われています。



グリーン・ツーリズムをよびかけるポスター
(山形県つるおか市)



↑ 食品の情報をついせきできる
トレーサビリティ